

## 第1回河北潟自然再生まつり

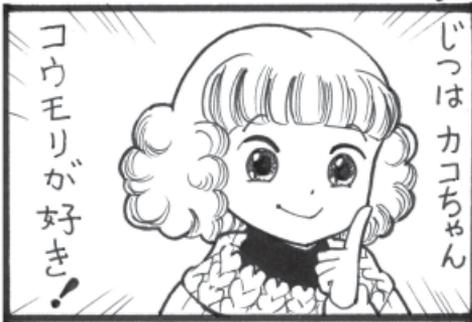
～多様な参加・多様な企画で成功～

2010年11月23日に金沢市こなん水辺公園において、「第1回河北潟自然再生まつり」がおこなわれました。これは、地域の自然保護活動を盛り上げる取り組みとして、河北潟に関わる多くの団体が統一日を設けて、環境保全活動や啓発のイベントをおこなったものです。8月頃から諸団体に呼びかけ実行委員会を作り、最終的には17のイベントのエントリーがあり、約250名が参加しました。

当日は寒冷前線が通過し、時折吹く寒風と小雨の中での開催となりましたが、多様な企画で大いに盛り上がりました。各団体が保全

活動に取り組んでいる現場を回るバスツアーでは、ハツタミズ保全活動や植生再生活動、ゴミ拾い、水辺体験などがおこなわれました。一斉水質調査は地域の小学生が参加して、河北潟の水質について学びました。昼のめった汁と山菜飯は大好評で、それぞれ250食が完食となりました。午後は、輪投げやネーチャーゲーム、外来種の除去活動、各団体の活動展示、昔の潟縁の風景のジオラマ展示などがおこなわれました。最後のグランドフィナーレでは、協力者より提供があった河北潟グッズなどの抽選会で盛り上がりました。

カコちゃん  
ショウくん かほくがたナルドレン



## 第19回 アブラコウモリ

夏の夕暮れ時、どこからともなく河北潟に押し寄せる黒い影。縦横無尽に飛び回り、障害物をうまく交わして目の前をすり抜けていく。その正体はアブラコウモリです。高空を飛ばず、目線がその少し上を飛ぶことが多いので、よく目立ちます。翼を拡げると20cm以上になり、普段飛んでいる姿を見ると、けっこう大きな印象がありますが、実際には胴体の長さは5～6cm、体重は5～10gしかありません。まれに動けないでいる個体や死体を見つけると、とても小さな生きものであることがわかります。

どこからやってくるのか、どこに向かうのか分かりませんが、夕方、日が沈んで薄暗くなった頃、干拓地にはたくさんのアブラコウモリがやってきます。おそらく障害物の少ない広い空間があり、さらに餌となる飛翔する昆虫が河北潟にはたくさんいるからだと思います。この昆虫の中には、田畑の害虫も含まれるものと思われ、その点からは益獣といえます。また餌にはユスリカなど水生昆虫も含まれますが、こうした水生昆虫は、幼虫時代に水の中の有機物を食べ、羽化しさらに上位の捕食者に食べられることで、水から陸への物質循環を担っていますが、その仕組みの中にアブラコウモリも重要な役割を担っているかも知れません。

コウモリは洞窟にいるといったイメージがありますが、アブラコウモリは別名をイエコウモリといい、屋根裏などの家屋をすみかとしています。都市部にも多く、人にとってたいへん身近な存在です。

またコウモリは吸血するとのイメージもありますが、先に書いたように、このコウモリは昆虫食で、血を吸われることはありません。また、よくコウモリは鳥か獣かとクイズになりますが、アブラコウモリにも体毛が生えていて、間違いなく哺乳類です。翼は羽毛でできているのではなく、指の間の皮膚が伸びた膜からできています。

その他、コウモリ類でよく知られていることとして、超音波を発して周囲の状況を知ることができる(エコーロケーション)ことがあります。その性質を利用して、周波数をキャッチできるバッドディテクターという装置を使って、コウモリの種類を推測することができます。2～3万円で市販されているものもありますが、簡単な超音波の可聴音への変換と増幅装置ですので、昔のトランジスタラジオの製作などを手掛けた方であれば、自作することも可能です。自作の方法を紹介したインターネットのサイトもあります。(文：高橋 久)

## 河北潟湖面利用協議会の到達点と成果について(中間報告)

河北潟湖面利用協議会事務局 高橋 久

2000年代前半から河北潟にモーターボートが目立つようになってきました。自然観察会やその他のフィールドワークなどの際に、湖面を高速で行き交うボートがみられるようになりました。

モーターボート利用が増えた場合、騒音問題や事故の他に、野鳥などの自然環境への影響も考えられることから、2005年10月に開かれた河北潟自然再生協議会の例会に話題として取り上げました。協議会には、河北潟湖沼研究所や地元の環境活動団体のみでなく、河北潟でモーターボートを使用してバス釣りをするグループも参加しています。そういう点ではデリケートな問題と認識していましたが、あえて議題に挙げたところ、河北潟の湖面利用者にとっても、今後のモーターボートの利用の増加は問題であり、自分たちが環境を保全しながら河北潟を利用する上では自主規制も必要である、との認識を持っていることが示されました。既に河北潟でバス釣りをしている複数の団体の間では、湖岸に営巣するタカのチュウヒの保全のために、立ち入り禁止区域をつくっていたことから、自分たちで守るべきルールをつくり、今後の利用者間での調整を図りつつ河北潟を守る運動を拓げていったらどうか、との意見がまとまりました。

その後、河北潟自然再生協議会の中で、モーターボート利用の現状について、現地調査や聞き取り調査をおこないつつ議論を重ね、2007年7月に「河北潟におけるモーターボート・水上バイク等の使用状況と問題点(仮)」という文章をまとめました。

そこでは、河北潟でのモーターボートによる湖面利用の現状とそれぞれの利用形態の問題点についてまとめるとともに、利用者に対して自主ルールの策定を呼びかけました。これに基づいて、2007年10月14日にフナ釣りの関係者との協議をおこないました。規制の対象となるウエイクボードや水上バイクの団体へまで働きかけるのは一段階おいて、まずは味方になりそうな団体からという日和見的な作戦でした。「釣りへの深刻な影響は今のところないが、舟で釣りをする人もおり、危険を感じている」「ボートが増えることで、湖岸植生への影響や様々な湖へのかく乱が起こることを懸念しており、何らかの対応は必要と考えている」との意見をいただきました。

その後河北潟自然再生協議会において議論を続け、大まかな結論として、1)何らかの大胆な規制が必要、湖岸植生や野生生物が多い区域では、高速でのモーターボートの運行を禁止する、2)利用者の合意のもとに自主的な規制をおこなうのが一番望ましく、湖面利用のルール策定のための協議会を設置する、との方針を掲げました。しかしこの段階では、河北潟自然再生協議会が呼びかけの中心となることは考えておらず、積極的な努力はするものの、あくまで行政がおこなうべき課題であると考えていました。そこで、河北潟を所轄する自治体の担当部局に相談し、調整役を依頼しましたが、複数の部局

から、窓口にはなれないが河北潟自然再生協議会が音頭を取るのであれば参加はするとの返事があり、ここにおいて河北潟自然再生協議会が矢面に立って、利害関係の対立も予想される利用者をとにかく一同に集めてみようという決心しました。かくして2009年6月27日に金沢市こなん水辺公園において「第1回河北潟の湖面利用を考える集い」を実施しました。

このときの参加者は48名で、内訳は、フナ陸釣り、バスボート、カヌー、ウエイクボード、NPO・野鳥専門家、農家・住民、行政などでした。モーターボートの利用者が全体から見ても少なく、さまざまな利用者の意見を十分に集約できたとはいえませんが、動機はそれぞれ異なるものの河北潟を大切に思う気持ちは共通であることが分かりました。また、当初予想した深刻な対立はなく、自然保護の点では意見の隔たりはありませんでした。

同年10月17日に第2回の会合をおこない、当面の利用ルールとして、東部承水路や競馬場裏手の野鳥の多いエリアは、できるだけ利用を避けるということを確認しました。翌2010年2月7日に第3回の会合を開き、河北潟の「湖面利用ルール」を策定しました。また同時にこの集いを継続的な取り組みとすべく、参加団体からなる「河北潟湖面利用協議会」を結成し今回をその第1回協議会とすること、今後2回の会合を開いていくことを決めました。

2010年8月に第2回協議会が開かれました。この中でルール運用開始後の問題点・反応について話し合わせ、「制限が厳しいという意見はあるが、とりあえずやってみよう」「厳しいという意見が出るということは、ルールが浸透してきていること」「へら鮒釣り大会ではルールを尊重しようということになっているが、個人での釣りには適用しにくい。徐々には浸透させているつもりであるが、まだまだ時間がかかる」といった意見が出されました。また、「フナ釣りの人には、寄波が減るなど、むしろメリットの多いルールではないかと思うので、その点をぜひアピールしていただきたい」「今までやっていた人には抵抗があるが、これから利用する人には、ルールは違和感が無く理解されるのではないか」といった意見が出されました。

今後の対応については、「ただルールを作ることを目的としているのではなく、ルールを作ることを通じて話し合いをおこなうことを重視してきたので、この姿勢は続けたい」「釣り人同士での話し合いの場ではルールを押しつけるのではなく、ルールのことをよく話して理解してもらおうようにしている、話し合えば分かりあえる」「規制される立場のものも集まって作るルールであり、お互い納得してつくる」といった意見が出されました。

ルール策定1年後の2011年2月には第3回の協議会がおこなわれました。この中で、ルールの普及について、「釣具屋さんにおいてもらったチラシは全部無くなった。

## 第15回 田螺拾い、シジミ採り

河北潟の東側に位置する集落、「潟端」<sup>かたばた</sup>で暮らしてきた昭和4年生まれの坂野 巖さんに、水郷の景観がひろがっていた1950年代頃（昭和34年頃）までの潟端の自然と暮らしについて聞き書きしています。

河北潟が干拓される以前の潟は、塩水の混じる汽水湖でしたので、カレイやサヨリなど海の魚もよく見かけました。魚貝類が豊富で、潟縁ではシジミ貝がたくさん採れました。潟端には河北潟に通じる川が数本流れていましたが、その河口部の潟の中を歩くと、無数のシジミが足の裏に当たり、シジミの上を歩くようなところもありました。シジミはそうした河口部の砂地のところに集まっていたのですが、川には黒色の大きな貝が泥の中にいました。ドロガイまたは淡貝とかカラス貝と呼ばれ（イシガイの類）、川のどこにでもいる様子で前搔き（川底に潜む魚などを獲る漁具）で良く採れました。大きいので食べ応えがありましたが、食べ過ぎるとお腹が緩むので、3～5つ以上食べるなどいわれました。田んぼにはタニシがばらまいた様にいました。

### 田螺拾い

稲刈りを終え、脱穀作業も終えた10月頃になると、近所の主婦達が数人集まって田螺拾い<sup>たにしひろ</sup>に出かけたものでした。普段から仲良くしているメンバーが2～3人、多い時には5人くらいで相談し合って、天気の良い日を選んで行きます。あまり目立たないよう密かに行動していました。行き先は部落北側の田んぼが中心で、通称フゴ地帯（潟から切り離されてできた沼地のあった場所。周辺より地盤の低い湿田地帯）の田んぼの川寄りが狙い目でした。川（用排水路）ももちろんです。「田螺は塩分にとくに弱くて棲むことができない。」と、古老などから聞いていたので、潟に近い側の田んぼには行きませんでした。潟端より北の、中條フゴから太郎フゴ、旧井ノ上村の五反田地区、中須賀地区まで遠出したようでした。

タニシは粘土質の田んぼには溢れるようにいました。砂がかったところには見られず、粘土質で泥深い太郎フゴにはとくにたくさんいたようです。また、水路にもいましたが、多くは田んぼに上がってきました。田螺拾いは稲刈り後の暖かい間だけでした。寒くなると一斉に泥に潜って姿を見せなくなりました。

田螺拾いをする女性の格好は、もんぺに脚絆<sup>きはん</sup>、割烹前掛け、綿入れのベストをして、腕抜きを付け、頭には手拭い、その上に頭巾をして、さらに笠をかぶりました。左手には拾った田螺を入れるイコ（2升入り）を持ち、右手で田螺<sup>がます</sup>を拾いました。イコに溜まった田螺は吠（肥料袋。肥料を使い終えた後、川水で洗って乾かして再利用した。）や「いずみ」（縄で編んだバック）に入れました。

タニシは、現在水路などでみられるタニシよりも大きくて丸みのある貝でした。ただ当時も大きいタニシと小さいタニシがいましたが、食べ応えのある大きいタニシだけを採っていました。小さいものはやがて大きくなると思っていました。ザリガニが増え、農薬を撒かれたりしたことで、タニシが減ったような印象がありました。今では食べる人もいません。

### 田螺の調理

持ち帰ったタニシは、自宅の窯に大きな鍋を掛けて、何回にも分けてたくさん茹でます。天気の悪い時に一気にする作業でした。棒で混ぜながら茹でますが、混ぜていると貝と貝があたってジャラジャラと音がするのでした。茹で上がると、固く閉じていた蓋がとれ、身の部分を通し針<sup>はらわた</sup>を使って取り出します。腸は殻の中に残しました。小学生の子供でもできるので、親の手伝いをしたものでした。貝殻と腸は空き地

や畑の隅に穴を掘って埋めました。

取り出したタニシの身の部分を、今度は藁灰わらばいを入れた桶の中で水洗いします。わたのかすやぬめぬめの滑りをとるために、足で踏み洗いし、藁灰で滑りを十分に取り除きます。そうすると、アクが取れて美しい黄白色になります。綺麗になった身を水の中で冷まして出来上がりです。これを食品として近江町などに売りに行きました。タニシは他に業者がいなかったようで高値で売れました。当時は女性の副業になるような仕事も少なく、タニシの処理作業は良い小遣い銭稼ぎになりました。出来上がったタニシの身を金沢の近江町市場へ持っていくと、店の人が予想以上の高値で買ってくれたようです。帰る時にもまた持って来て欲しいと言われたようで、嬉しくて「又来るから頼むね。」と、言葉を交わした思い出話も聞いています。

余ったタニシは、豆と煮付けて食べました。売るほどの量が採れなかった時も自家用にしました。豆とコンニャクを小さく刻んで混ぜた煮物は美食でした。

## シジミと淡貝

シジミは年中採れるものでしたが、渦の水が温む7月～9月頃しか採りに行きませんでした。シジミを採りに行くのは、もっぱら女性や子供達の仕事でした。足の裏でこすりながら寄せ集め、手を入れて拾い上げます。現在川で見られるようなマシジミと違って、黒色の大粒の貝でした。百石川とアクスイ川の河口の渦にいるシジミは、とくに大粒で綺麗な黒色をしていましたが、部落の境界付近に位置するのであまり採りに行きませんでした。黒色のシジミの貝の裏側は、紫味のある紺色をして綺麗でした。

シジミはタニシよりも安値でしたので、渦端ではシジミを売りに行く人はほとんどおらず、たくさん採った時は近所の人に配りました。また、淡貝は売れませんでした。淡貝もタニシと同じ調理方法で、身を出してアク抜きしたものを醤油などで煮付けて食べましたが、お腹が緩むので少量で十分でした。

(聞き取り・文 高橋奈苗)

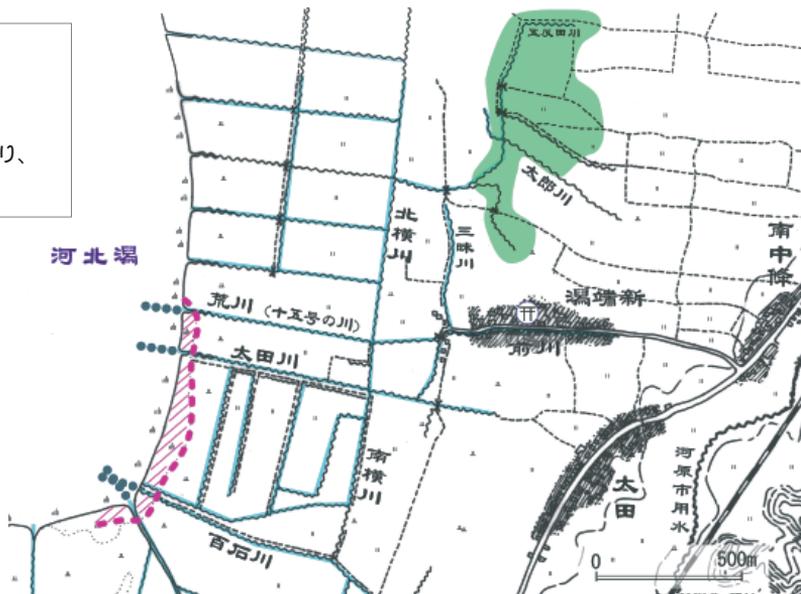
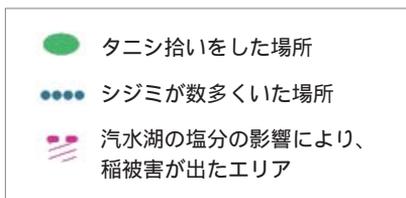
蓋は取り除く



タニシ： 腸は殻の中に残した。雌の体内には卵がたくさんあった。

いずみ

藁製のショルダーバック。稲わらでぬった縄を編んで作られた。年寄りのいる家は作ってもらえた。



図．タニシ拾いをした場所とシジミが多数みられた場所

9月3日(日) 続き

金鉱採掘地点からオンギ川に沿って下る。河原は広くなり草原もいくらか良く茂って、放牧の家畜群も多く見られる。草原の中に1つ、2つと白いグルがある。家畜の中にヤクが混じる割合が高くなる。オルハン川流域にくらべて寒冷的ことが推測できる。オンギ川の水量は鉱山から下流は減水したままである。

河原は緩やかな丘陵とつながり、道路は河原を離れて丘陵の中腹に沿ってゆく。丘陵は低い草原に覆われ、ときどき小さなハタネズミが道を横切る。

ここから南下してオンギ川がゴビ砂漠に入る地域で実施されているサジ栽培の現地を視察する。

このモンゴル紀行の(7)にも書いたが、サジ栽培はオンギ川の減水と水質汚染に悩む遊牧民の人たちの生活支援のために、オンギ川運動で進めている対策の一つである。広い草原(放牧地)の一部、1ヘクタールの土地を区切ってサジを植え、その果実の収益で放牧民の生活を助ける計画である。この土地は政府の許可を受けて柵を設けて放牧家畜の侵入を防ぎ、サジの苗木を植えて管理を現地の遊牧民(農民)に委託している。

この日は2カ所、次の4日は2カ所の計4カ所の試験地を視察した。

#### 試験地 1

オンギ川に近い場所にある試験地。丸太の杭に鉄線を張った柵で囲った長方形の土地。サジは2年生で樹高50センチから80センチに成長しているが、草に紛れて見分けにくい。柵の内側はイネ科の草がかなり良く生長しているが、柵の外は草がほとんどない。まわりに放牧されているヒツジなどの影響と思われる。柵の中にはハタネズミの穴が多く、また、柵を抜けてノウサギが侵入してきてかなり被害を受けているという。枯れた株があちこちに見られる。

ここから50メートルほど離れたオンギ川まで行ってみる。このあたりではオンギ川は水量が多く、川幅30メートル以上あり、水深も1メー

トルはある。水は澄んでおり、体長15センチ位の魚が沢山泳いでいる。

#### 試験地 2

川から離れて広い平原に入ったところにある。浅い井戸を掘って水を汲み上げ、細い水路を通じてサジの苗木へ導いている。ここのサジも2年生だが、平均80センチ位に成長していて、試験地1より成長が良い。畑の傍にここを管理している家族のグルがあって、中年の夫婦とウランバートル農科大学の学生という娘さんがいた。このほかに男の子が2人いるという。

サジ畑は苗木の間隔が2メートルほどあって少し広すぎるようだが、サジは浅い側根が横に伸びて芽を出すので、この位の間隔でも良いという。グルの中で、解体したばかりのヒツジの内蔵を煮たものをご馳走になりながら、サジ栽培についていろいろと伺った。

北上して国道に戻り、ウブスハンガイ県の主邑であるアルバイヘルで、市中の通りに面したホテルに泊まる。ロシア人の小母さんが主人らしい。

アルバイヘルは社会主義時代からこの地方の主要な町だったらしい。このバヤンプラ(?)ホテルは当時の政府高官の宿舎だったと思われるが、その後の手入れが行き届かないためにひどく荒れている。室内の調度品やカーテン、ソファはたいへん立派だが、ドアは木肌が出た材木、トイレは便座が壊れていて座れない。宿泊



オンギ川。  
このあたりだけ水があり、小さな魚が多い。

料は安かった。建物や室を区切る壁は厚さ22ミリのコンクリートだが、室の外壁の一部には大きな扉があったらしく、今はその部分を板で塞いでカーテンで覆ってある。この紀行(10)で書いたウランバートルの火力発電所と同様、社会主義の崩壊を経てきた時代の変遷を感じさせる。泊まった部屋の見取り図を載せておく。

夜に入って室内の気温は15度を下回る。ホテルのマダムが熱いお湯の入ったポットを持ってきてくれたのでほっとした。

9月4日(月)

朝、快晴で少し風がある。8時の室内の気温は13度。

ホテルの前の大通りを見ていると、通勤者らしい男女がまばらに通ってゆく。時にはモンゴル服やルパシカ風の外套を着た老人がゆっくり

と杖をついて歩いてゆく。

レストランが修理中なのでタイワンさんの知人の家で朝食を頂く。簡素なグルの中で手製の肉汁のヌードルを手際よく作って下さる。

朝食をすませて、昨日、藤木さん達がディスコで知り合ったという日本語教育の先生に会うために、市内のメルギド中学校へゆく。

市街地の端にあるかなり立派な学校で日本語教育担当のド・ドラムスレンさんは若い女性。二年間日本に留学したという。モンゴルは小・中学校一貫教育で、この学校では2年から11年までに1クラスずつ日本語学級があるという。3年のクラスに案内された。皆、日本語で名前や学年を上手に話す。この県は岡山県と姉妹県で、大阪の高槻市とも連絡がある。モンゴルの小さな地方の町で、きれいな日本語を聴くとは思いがけなかった。



サジ栽培地 No.1



サジ栽培地を管理する一家

(3 ページのつづき)

釣具屋さんに行く人にはルールは浸透している」「モーターボートの練習については、ルールを厳守して実施している。釣り人がいる場合は、その場所を避けて練習している。チラシをもらって全員がルールを認識している」「ウェイクボードは、ルールの範囲内でおこなうようにしている。お客さんも皆ルールのことを知っていて、風向きでルールの範囲の場所で無理なときなど、お客さんの方が理解して中止したりしている」といった状況が報告され、確実にまた積極的にルールが尊重・実践されている状況が確認されました。

ところで、2010年4月26日に開催された「第6回内灘海岸魅力づくり委員会」の概要が内灘町 web ページよりダウンロードできますが、そこにはこのような記載があります。「(事務局)資料の中に今年2月にできた「河北潟の湖面利用ルール」を添付した。これは、河北潟湖面利用協議会が中心となって1~2年の期間を擁し作成したもの。今後のルールづくりの身近な参考になればと思う。

(委員)このようなルールがあったとは誰も知らない。罰則の無いこのようなルールでは、意味があるのか疑問だ。(事務局)確かに認知度も低く、規制として機能しているのかは疑問だが、様々な関係団体が議論を交わしてルールを作ったという意味では参考になる。」

こうした意見、特に委員の指摘については当然のことと思いますが、実際には河北潟の湖面利用ルールはきわめて有効に力を発揮しつつあります。成果に繋がった要因としては、1)自主ルールであることが力となっている、2)利用形態に関わらず利用者自身が普及のために頑張っている、3)ルールがあることにより堂々と適正に湖面利用ができる、4)ルール作成において、できるだけ誰も排除しない原則を貫いた、5)何よりも集まった人々が河北潟を守りたいという強い気持ちがあった、といったことが考えられます。そして、今後の課題としては、野生生物のための聖域を人が身を退くことによってつくることできるか、ということが挙げられます。

## 今年も実施しました！ チクゴスズメノヒエ除去活動

河北潟地区外来植物対応方策検討会と河北潟湖沼研究所は、河北潟の周辺の水路や河川において、外来植物の除去活動を続けています。今年も既に夏場のセイタカアワダチソウ抜き取り作業や、秋のホテイアオイ根絶作戦をおこないました。また、グリーン・アース河北潟として、石川県の雇用促進事業である水辺形成活動のなかで、西部承水路において大規模な外来植物の除去活動を実施しています。

さらに、「セブンイ - レブンみどりの基金」からの助成を受け、昨年に引き続き11月下旬から12月にかけて、チクゴスズメノヒエの除去活動をおこないました。

- 11月23日こなん水辺公園
- 11月26日干拓地幹線排水路
- 11月27日津幡川尻地区～潟端地区
- 12月4日金沢市大浦地区
- 12月11日金沢市大浦地区

津幡地区ではこの3年間の取り組みで、ほとんどのチクゴスズメノヒエが取り除かれ、根絶までもう一息となっています。また、金沢市の血の川では、発生したホテイアオイを早期に取り除いたために、その後の発生はありませんでした。



## 河北潟自然再生まつり 河北潟湖沼研究所も参加しました。

11月23日の河北潟自然再生まつりには、河北潟湖沼研究所も企画参加しました。主催企画である、「湖岸植生の再生実験」の取り組みでは、金沢競馬場裏の湖岸において、ヒシの植栽を市民参加でおこないました。これは、植物繊維のポットにヒシの種子と土を入れた「ヒシ爆弾」を湖岸に設置するもので、かつてヒシが生育していた場所で、現在は無植生となっている湖岸において、春以降の植生の形成を期待して実施されたものです。バスツアーの方々やその他の参加者が見守る中で、主に当研究所で湖岸植生調査をおこなっているチームが植栽をおこないました。

その他、主催企画ではありませんが、めった汁と山菜飯の提供には、当研究所の理事グループが大いに貢献しました。



## 編集後記

この度、津幡町へ移転しました。新しい事務所は交通の便が良く、緊急雇用の方々への他、多くの来所者により賑やかです。10台の駐車スペースが埋まることもあります。(T)

